

## 論文の内容の要旨

論文題目 現代日本文学におけるトラウマの語り—フェミニズムとクィア批評の視座から

氏名 岩川ありさ

本論文は、現代日本文学において、トラウマ的な出来事の記憶が、いかに語られ、聴かれ、伝達されているのか、その困難さと可能性について、フェミニズムとクィア批評の視座から分析することを目的にしている。あまりにも衝撃的すぎて、言語化できないほどの出来事によって生じる精神的な外傷のことを「トラウマ(trauma)」という。戦争体験、被爆体験、性暴力、マイノリティへの暴力、虐待などの出来事は、その出来事が過ぎ去った後にも、その出来事を経験した人や共同体に影響を与えつづける。人文・社会科学において、「トラウマという事象」は、個人と集団、記憶と物語といった、社会的、文化的、歴史的な要素と切り離せない。本論文では、精神医学や心理学の中で培われてきたトラウマをめぐる理論や人文・社会科学の中で培われてきたトラウマの研究を参照しながら、現代日本文学を対象にしてテキスト分析を行う。

第一部「傷が語る—沈黙と証言」では、過去に書いた自らの小説について批判的に自己言及することによって、トラウマ的な出来事と向きあう小説の形式を作りあげている大江健三郎と林京子の小説をとりあげる。

第一章「組み替わる物語—大江健三郎「美しいアナベル・リイ」論」では、幼い頃に受けた性暴力の全貌を知ることができないまま成長し、反復強迫的な悪夢に苦しんできた主人公の女性サクラさんが、女性たちのネットワークによって、自らの人生を意味づけ直すことで、トラウマから回復するまでの過程が描かれた「美しいアナベル・リイ」について論じる。第二章「見過ごしてきたトラウマ—大江健三郎と「憑在論(hauntology)」」では、大江健三郎が、「美しいアナベル・リイ」執筆時に置かれていた歴史的、社会的なコンテキストと関連させて、トラウマ的な出来事について、「自己弁護」や「自己欺瞞」に陥らない語りを「星

座小説」という観点から論じる。第三章「記憶を聴く作家—林京子「祭りの場」と「長い時間をかけた人間の経験」をつないで」では、林京子「祭りの場」（初出『群像』一九七五年六月号）と「長い時間をかけた人間の経験」（初出『群像』一九九九年一〇月号）という二つのテキストをつなぎ、一九四五年八月九日に長崎で被爆した出来事の記憶が、時を経て、いかに想起され、語られるのかについて、トラウマと記憶とのかかわりから論じる。

第二部「世界を語る文法—人称、時制、仮定法」では、多和田葉子、小野正嗣、岩城けいの小説をとりあげる。多和田はドイツ語と日本語、小野はカリブ海やアフリカを中心としたフランス語と日本語、岩城は英語と日本語のあいだで表現を探り、従来の日本語の文法や日本文学に揺さぶりをかけてきた。第二部ではその実践をトラウマの問題とつなげて論じる。

第四章「境界の乗り越え方—多和田葉子『容疑者の夜行列車』論」では、世界中を旅しながら、国境や性別、さまざまなイデオロギーの間を越境していく主人公を描いた多和田の小説『容疑者の夜行列車』（二〇〇二年）をとりあげる。『容疑者の夜行列車』は、二人称代名詞で呼びかける語り方によって、発話の主体につくということを読者が意識せざるをえないようなテキストの構造を持っている。本章では、読者が、クィアなコードの断片をこの小説から読みとり、クィアな生の生存可能性を開く可能性について、イブ・K・セジウィックが論じたクィアな読書行為論とのかかわりで述べる。

第五章「前未来形の文学—小野正嗣『獅子渡り鼻』論」では、「この生は、将来において、すでに生きられた生となるだろう」というジュディス・バトラーの前未来形という概念が成立するまでの過程について整理する。その上で、小野正嗣の小説『獅子渡り鼻』（二〇一三年）を分析し、トラウマ的な出来事を経験した尊という少年の記憶の空白に寄り添う語り方について、前未来形という時制やアスペクトと接続させて論じる。

第六章「たがいを支えあう言葉の回路—岩城けい『さようなら、オレンジ』論」では、フェミニズム文学批評の成果をとりいれながら、岩城けいの小説『さようなら、オレンジ』（二〇一三年）を分析し、女性たちが物語を見出してゆく言葉の伝達回路について論じる。その際、二〇一四年の第八回大江健三郎賞受賞時の大江の選評を手がかりに、女性たちが複数の言語でたがいを支えあう言葉の回路を見出す過程について述べる。

第三部「物語の複数性をめぐって—クィア批評と聴き手」では、女性やクィアな人々が周縁化され、声を聴かれないできた歴史的なコンテクストの中で、理解しやすいマイノリティの物語に抗う語りの可能性を捉える。

第七章「クィアな記憶の継承—森井良「ミックスルーム」論」では、森井良の小説「ミックスルーム」（二〇一四年）をとりあげる。病のため、東京での生活を断念し、実家に帰った弓生は、家族を持ち、異性愛主義的な生活に足場を持った男性たちと性的な関係を持つ。語るに値する物語を自分は持っていないと感じる弓生と彼らの非対称な関係は、男性同士の有料発展場である「ミックスルーム」と家族の再生産の場である「リビングルーム」との対比によって示される。本章では、木村朗子が提起した「震災後文学論」とつなぎ、誰の生が「嘆かれるに値する生」とされ、誰の生が「嘆かれるに値しない生」とされるのか、その枠

組みがつくられる際に生じる不均衡について論じる。

第八章「コミュニケーションなクィア？—李琴峰『独り舞』論」では、二〇一七年に群像新人文学賞優秀作を受賞した李琴峰の小説「独舞」（『群像』二〇一七年六月号。単行本では『独り舞』に改題）をとりあげ、「彼女」という三人称代名詞で語られる主人公の女性が、台湾におけるレズビアン文学の金字塔である邱妙津の『鱷魚手記』<sup>ある舞の手記</sup>など先行するテキストと出会うことで自らの物語を見出す過程について論じる。また、初出の「独舞」（『群像』二〇一七年六月号）と単行本『独り舞』（講談社、二〇一八年）の異同についても分析する。

第九章「クィアな自伝—映画「ムーンライト」と古谷田奈月「リリース」をつないで」では、トリン・T・ミンハの「目が何を聴き、耳が何を話すか」（『このこのなかの何処かへ—移住・難民・境界的出来事』平凡社、二〇一四年）という問いから出発し、知覚レベルでの脱構築の作業を行うテキストを分析する。その際、自伝をめぐる議論を参照し、女性やクィアな人々が周縁化され、声を聴かれないできた歴史を捉え、女性やクィアな人々が、「主体」として自伝を書くことが困難を極めるのはなぜか、「呼び名」と「呼びかけ」の問題を中心に論じる。

第四部「べつの仕方—記憶、変身、連累」では、まず、多和田葉子の創作を歴史的に語ることができなかったものたちの声を聴く小説として読み直す。また、清家雪子の漫画「月に吠えらんねえ」（二〇一三～二〇一九年）を対象にして、アダプテーションという視座から、文学者の戦争責任を問う方法についても論じる。

第一〇章「記憶を伝えるということ—多和田葉子における「星座小説」」では、多和田葉子の小説をとりあげて、多和田の「言語的な実験性」や「言語的遊戯」が被傷性やトラウマ的な記憶の伝達といかに結びついているのかについて論じる。また、言葉を持たないホッキョクグマたちが「自伝」を書くという設定の『雪の練習生』（二〇一一年）は物言わぬ「他者」の声に応答する文学の可能性を追求している。虚構の力をつうじて、誰にも語られず、書かれないまま消滅してきた記憶を語るための回路を切り開く小説として。多和田文学を捉え直す実践を行う。

第十一章「変わり身せよ、無名のもの—多和田葉子『献灯使』論」では多和田葉子の「献灯使」（二〇一四年）をとりあげる。鎖国した日本を描いた『献灯使』において、自然環境の決定的な変化を経験した曾祖父の義郎と曾孫の無名のケア的なかわりについて論じる。その上で、多和田の近年の仕事に触れて、効率化を推し進めた近代百年を経て、規範的とされてきた身体のあり方を問うテキストとして多和田の文学を捉える視座を見出す。

第一二章「戦争の傷を見つめるということ—清家雪子「月に吠えらんねえ」論」では、清家雪子の漫画『月に吠えらんねえ』が「戦争詩」にいかに対応したのかについて論じる。もっとも愛した詩が戦争を鼓舞する表現になったとき、詩人たちはどのようにその事実と向きあうのか。萩原朔太郎の作品から受けた印象をキャラクター化した「朔くん」と北原白秋の作品から受けた印象をキャラクター化した「白さん」の「愛」の問題とつなげて論じる。

本論文では、以上の分析を通じて、文学研究、トラウマ研究、フェミニズム、クィア批評

の領域を横断し、現代日本文学・文化のテクストを時代や社会に開くための理論的な枠組みを提起する。誰の声が聴くべきものとされ、誰の声は聴かれないできたのか。この問いについて、本論文では、擬声語・擬態語、前未来形、「憑在論」といった文法や理論と結び、トラウマ的な出来事の記憶を証言する語りについて分析し、それまで見過ごしてきた不正義を読みとる視座を提示した。また、従来の日本語を問いながら、多言語のあいだで創作を続ける作家たちの小説を分析することで、言語の規範的なあり方の変容の可能性について論じた。漫画という表現が近代文学における戦争の問題といかに向きあっているのかについても分析した上、終章では、今も、不正義への抵抗が行われており、その痕跡を受けとり、伝達するための語り現代日本文学・文化において行われていることを明らかにした。